



ヤマ
タチノ
モノガタリ

—地域文化遺産の保存と伝承—

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究成果展

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22～26 年度）
「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」

この国の地域では、その土地固有の地勢、気候、風土の中で、様々な生業、産業、流通、信仰、政治などの文化的活動が展開され、地域特有の歴史文化が形成されてきました。そして、人々の交流の中で育まれた文化的活動のなかから、多様なモノが生み出されました。それらの過去に生み出されたモノは一般に文化財と呼ばれますが、私たちは地域文化に基づいて生み出された文化財の総体を特に「地域文化遺産」と呼んでいます。

この山形では、かつて最上川舟運や出羽三山信仰などによって多彩な文化活動が開かれました。これらを含む多様な地域文化によって生み出された文化遺産は、当時の山形の様相を今に伝えます。

地域に固有に存在する「地域文化遺産」は、その地域の過去の文化的活動を知らずして存在であり、それらの再発見による地域のアイデンティティの再認識は、新たな「地域の文化力」を活性化させることでしよう。

それらの文化遺産を保護していくためには、地域の方々の文化遺産に対する理解と愛着が不可欠となります。私たちが過去5年間の研究を通じて再発見したこの地域に現存する「地域文化遺産」を、生み出された背景となる山形の歴史文化の魅力とともに、「地域文化のモノガタリ」として紹介いたします。

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター長 澤田 正昭

目次

糸と紙の再考	4
蚕と絹と神様と	12
小さな祈りの交点	18
歴史のはざまに	24
仏師の系譜 中央と地方、モノとヒト	30
隠された湯殿山信仰と御沢仏にみる復興	42
文化遺産に影響を与える環境要因と予防保存	54
石とともに生きる	60

糸と紙の再考

素材と技術の活用から

大山龍顕

大江町の中の畑雷神社に「御戸帳」という青芋の奉納幕が奉納されていた。江戸から明治時代にかけて六〇点が残り、今は町の指定文化財として保管されている。この御戸帳の保存処置をしたことから、大江町の特産であった青芋を復活させようという活動を訪ねた。緑濃く育った青芋畑の片隅で青芋の茎から剥いだ表皮を板に乗せて、金属のついた芋引き具で削ぐと白い繊維が採れる。この繊維は厚みが違うものの和紙の原料である楮の白皮の状態によく似ていた。（光を透き通すこの白い繊維はいい紙になるのではないだろうか。丁度、隣町の西川町には紙漉きの技術が残っている）。思い付きではあったが、その二つの素材を合わせた青芋紙を作る取り組みを主軸に、地域の素材の魅力について触れる機会を作ることができればと考えた。

青芋と大江町

青芋は「芋麻（ちよま）」や「からむし」とも呼ばれ、山野や人家近くに生えるイラクサ科の多年草の植物をさす。植物繊維の中で最も長く丈夫な繊維を活かして、古代より衣料原料用繊維として用いられてきた。日常的な作業着や魚網などに使われる一方で、高級な上布の原料ともなった。山形では江戸時代に米沢藩などが栽培を奨励し、越後上布や小千谷縮などの原料として出荷され、舟運を通じて京都や奈良へも運ばれた。青芋は山間部の寒冷地の気候を好み、大江町は適地であった。現在の大江町全域と朝日町の両五百川方面にわたって特産品として産出され、七軒七夕畑の青芋は「七軒芋」と呼ばれ、最高級品とされたと『大江町史』にある。また、

た茎を一本ずつ取り、根元から三〇センチメートル程の所で折り目を付けて芯と茎の間に指を入れ上下二枚に表皮を剥ぐ。剥いだ表皮を水に浸ける。板の上に表皮をのせ、裏から芋引き具を当てる。繊維だけになるように板の上でこすり青芋の繊維を出す。

⑥乾燥。芋引きした後は陰干しにする。

⑦糸作り。芋引きをした繊維（原麻）を指で一本ずつ裂く。裂いた原麻を立てた竹の棒などに挟んでまとめる。細く裂いた原麻を指で一本ずつ取り、先端でもう一本の原麻と指先で捻り合わせて繋げる。繋げた後に撚りかける。

大江町では一から二センチメートル幅で一メートル程の長さとなる繊維をまとめて束にして出荷していた。確かに、糸作りの手間を考えると芋引きした状態の方が輸送し易かったことがわかる。大江町では、蚊帳などは作られたが、反物は織られなかったといわれる。しかし、中の畑雷神社の「御戸帳」を見ると、織りだされた素朴な模様で、女性たちの創意が様々に表れていることが分かります。手間は大変ながらも、青芋の織りを楽しんでいたことを窺わせる。

他地域の取り組み

青芋の栽培は大江町だけでなく、各地で行われている。いくつかの活動の調査を通じて、青芋の取り組みについてみてみたい。

福島県昭和村は小千谷縮や越後上布などの最上級の麻布の原料供給地として全国的に知られた「からむし」の産地である（大江町では「青芋（あおそ）」と呼ぶが昭和村では「からむし」と呼ぶ）。原料供給地に留まらず、大麻を用いた農作業着制作の技術を応用して栽培から織まで行う体制を確立して、村へ留学して技術を学ぶ「織姫制度」という研修制度を設けた。研修生が定住するなど、地域特産を活かした独自

山形藩における天保八年（1837）の出荷荷駄数と役高では、紅花よりも高く、重要な特産だったことがわかる。「船中安全絵馬」には最上川で使われた代表的な川船である小鶴飼舟が描かれ、当時の舟運の様子を窺える。大江町の山間部が青芋栽培により豊かな生活を送った様子は「前句寄せ」といった奉納額などにも残っている。しかし明治期以降は需要が激減し、養蚕から林業へと産業の変遷が進み、栽培は減り姿を消してしまった。

そうした状況の中、青芋復活夢見隊は元大江町職員の前上弘子氏が発起人となって平成二十年に十数名の有志と共に結成した。大江町の歴史民俗資料館の管理業務や大江町立本郷東小学校の校章のモチーフが青芋の葉だったことなどがきっかけとなっている。大江町橋上地区の「橋朗クラブ」を中心に「青芋特産品づくり支援隊」を結成した後、青芋復活夢見隊となり、繊維のための原料供給地であった大江町の環境を踏まえて織物に拘らず、青芋を原料とするうどんや御膳、敷パッドといった様々な商品開発を通じて青芋を見直す取り組みを行っている。

青芋と大江町

大江町の青芋の栽培から糸作りまで順を追ってみてみたい。準備は五月の上旬から中旬にかけて行い、杉葉などを集め畑の除草を行う。

- ①焼畑。五月二十日の小満の頃に行う。焼畑により不揃いな発芽を揃え、灰が肥料ともなり、害虫の駆除も兼ねている。
- ②焼畑後には追肥をする。
- ③杭打ち・防風ネット張り。
- ④刈り取り。七月の中旬に刈り取りが行われる。
- ⑤芋引き。刈り取った葉を先端からしごいて落とす。茎を束ねて長さを揃え、数時間水に漬ける。次に、浸し

の活動を通じて活性化を図っている。

新潟県上越市は、かつて上杉謙信、景勝の春日山城があった地である。青芋の紙を使った照明の新聞記事を見たことから、NPO法人越後青芋の会の会長近藤喜一郎氏を大江町の方たちと一緒に訪ねた。

越後青芋の会では上杉謙信ゆかりの地として謙信の軍資金の元であった青芋を地域興しへ活用したいという出発点があった。紙漉きは近藤氏が独自に研究開発した方法と道具で行っており、販売も進めていた。

改めて振り返ると、山形県内の他の地域でも、青芋の取り組みが行われている。米沢藩領であった南陽市では染織家の川合ひさ子氏を中心として、市内の吉野地区に自生して残っていた青芋と、栽培や削ぎの技術を持っていた年配の方々からの伝承により、栽培から糸作りまで復活した。取り組みは長く、平成元年から二十五年を経て、青芋取組み二十五周年記念の「青芋フェスティバル」が開催されている。

南陽市にも大江町同様に織るという技術はなかった。その中で、川合氏が織物の制作まで行ったことで、取り組みの原動力となったとみられる。川合氏に三十年の取り組みについて伺う機会があったが、振り返って「楽しかった」と言われた。青芋は栽培から芋引き、糸作りと全て手作業によるため繊細で手間がかかり、大変なことが多い。また、取り組みを続けることは一人ではできない。ふるさと創生事業や市の支援を経て、「古代織の伝統を守る会」を発足させ、地域と協力することで取り組みが続いたことが大きいという。一人ではなく、地域の人たちと続けてきたことが言葉から窺える。

南陽市の取り組みをみると、実は地下水脈のように大江町の取り組みへと続いていたことがわかる。川合ひさ子氏と一緒に青芋復活にも取り組まれた菊地和博氏（現東北文教大学教授）は東北芸術工科大学でも教鞭をとられていた。大江町へも度々訪れて、青芋復活夢見隊にも力添えをされている。地域の調査研究を通して当時の文化財保存修復研究センターの役員にも影響を受けた者が多かった。大江町指定文化財となった「御戸帳」が初めて発見された時には茶箱に四十八



出荷時の青芋「芋かせ」



「船中安全絵馬」明治19年 巨海院（大江町）



刈り取った青芋から表皮を剥く



大江町の青芋畑（7月）

枚が詰まった状態で、もし南陽市の取り組みや菊地先生などとの繋がりがなければ、青芋の奉納幕だとは気付かず保存処置がされていたか分からない。そう考えると、私自身その流れの中にいることに気づかされる。

また、南陽市では食品としての取り組みが平成一四年から行われている。川合氏と共に青芋復活に取り組んでいた漆山英隆氏は小学生が青芋の葉を食べてしまったことをきっかけに食品化に取り組まれた。当時は青芋を食べる認識などなく、保健所でも実績がないためになかなか許可が下りなかった。そこで、青芋の葉のデータを丹念に集めたことで、ようやく認められた。平成一六年には食品としての「青芋」の商標登録を行い食品化への道を開かれている。

現在、食への取り組みは大江町でも行っている。南陽市の取り組みも知り、これまでの大江町の取り組みも間近に見てきたが、食についての取り組みは手法も異なり、双方が独自に取り組んできたものにみえる。とはいえ、大江町が食へ取り組むきっかけとなった新潟の青芋うどんは南陽市の影響を受けている。直接ではなくとも、先駆者としての漆山氏の取り組みは巡り巡って大江町へと影響を与えている。

また、新潟上越市、奥会津に位置する昭和村、米沢藩領であった南陽市を見直すと上杉家の統治した場所に青芋が残っていたことが窺える。大江町の左沢にも最上川の舟運のため、米沢藩が番所を構えて舟運を行っていた。一見すると離れた地域間だが共通する背景で繋がっている。それを糸口とできるか分からないが、県内に二団体も青芋に取り組んでいることは他に聞いたことがなく、大江町と南陽市の地域間交流が深まることで、新たな展開に繋がることが願ってやまない。

山形の紙漉き

青芋の取り組みには地域間の繋がりがももてきたが、山形の紙漉きについてはどうだろうか。近年の山形県では上山市

の麻布紙（二〇一一年まで）、西川町の月山和紙、白鷹町の深山和紙（県指定無形文化財）、舟形町の長沢和紙が知られている。これ以前の紙漉きについては菊地和博『手漉き和紙の里やまがた』や市町村史をもとに概観してみたい。

村山地方では江戸時代には紙漉きが盛んだった。双月村（山形市）と高松村（上山市）が代表的で、特に双月村は明治五年（一八七三）には全一〇三戸のうち、七九戸が紙漉きを行っていた。この地域は最上氏統治の頃にはすでに最上紙として知られていた。紙漉きが七〇戸を超える光景は壮観であったろう。他にも、月布村（大江町）・関山村（東根市）・沼沢村（東根市）・川原子村（天童市）などがあった。現在の大江町山郷地区の深沢・伏熊・貫見地区や小清地区でも昭和初期まで行われていたという。山辺町でも紙漉きが行われていた。西川町では吉川と岩根沢で漉かれ、岩根沢では下小沼・西岩根沢・桂林・沼ノ平の各集落で生産されていた。岩根沢の西山紙は郡内や庄内地方へと出荷されていた。

置賜地方では米沢藩に奨励されて始まり、現在も白鷹町に深山和紙として残っている。各地域で、多彩な紙が漉かれていた一方、庄内地方では鶴岡の城下町に紙漉き町の名が残るものの、明治初期にはほとんど見られず、紙漉きは盛んではなかったとみられている。

近世から近代の紙漉きをみると、西川町だけでなく大江町でも紙漉きが行われていたと分かる。和紙は障子紙や、襖紙として使われたが、近世の使用例として興味深いのは紅花や青芋の輸送時の包装紙や油紙などで使われたことである。油紙にも当然和紙が使われたが、水に濡れることを防ぎ、船による輸送を可能にした背景には紙漉きの技術があったといえる。大江町や山間部の地域は青芋の産地でもあり和紙もまた隠れた特産だったことが窺える。

近現代に入ると、和紙利用は一部の和傘や漆漉し紙（上山市）として続いたものもみられたが、衰退は避けられなかった。平成四年の「紅花国体」には長沢和紙と深山和紙合わせて二万七千枚が賞状などに使われた。和紙を用いた賞状作りは全国的にも広く行われており、近年、地域の和紙活用の一



西川町岩根沢の紙漉きの様子（昭和50年頃、板坂賢二氏撮影）



三浦一之氏の紙漉きの様子



大井沢自然と匠の伝承館での楮蒸し・皮剥ぎ（平成25年）



西川町岩根沢の楮の皮剥ぎの様子（昭和50年頃、板坂賢二氏撮影）

つとなつていく。

和紙の原料は「楮」や「雁皮」、「三桧」が知られているが、山形で使われるのは「楮」で、桑科の植物である樹皮の内側の繊維を使う。楮で作った紙は楮紙ともいう。手漉きの楮紙の製法は他の地域とも大きくは変わらない。紙漉きの工程を簡単にみることにする。

- ① 楮の刈り取り。十一月から一月頃に刈り取りを行う。西川町では十一月末頃に行っている。
- ② 楮を切りそろえる。刈り取った枝を約八〇センチメートルほどに切り揃える。
- ③ 楮蒸し。楮を束ねて釜に立て、桶をかぶせて蒸す。蒸しあがったら冷水で冷やす。
- ④ 皮剥ぎ。蒸しあがった樹皮を手早く剥がす。
- ⑤ 皮引き。乾燥させた後に再度水に浸して小刀で樹皮を削ぐ。樹皮が付いた状態を「黒皮」といい、削いだものを「白皮」という。
- ⑥ 煮熱。白皮をアルカリの液体(灰汁やソーダ灰)で煮る。
- ⑦ 塵取り。よく水洗した後、繊維に残った細かい傷や節の汚れなどを手で取り除く。
- ⑧ 叩解。楮の繊維を木の棒で叩いて繊維を解す。ピーターという機械を使うこともある。
- ⑨ 紙漉き。原料を「紙漉き舟」という水槽に水と一緒に入れて「簀桁」という木枠と簀を使って漉き上げる。「ネリ」と呼ばれる粘液を入れることで、水中に繊維が均一に浮遊した状態となり「簀桁」の上で前後などに揺ることで厚みを調整しながら繊維を絡ませる。漉き上げた紙は同じ位置を重ねて「紙床」という束を作る。
- ⑩ 脱水。プレスして水分を絞る。
- ⑪ 乾燥。一枚ずつ板などに貼り乾燥させる。

麻紙

山形の和紙の原料は楮が主体だが、遡ると、紙の起源には麻の古着などが原料とされ、古代には麻の紙「麻紙」が主流であった時期がある。麻紙には大麻が使われたが、苧麻も用いられていた。苧麻は青苧の事である。楮紙との違いはその製法で、平安時代の『延喜式』(巻十三、延長五年)には製紙の工程と一日の仕事量が記されている。

- 『煮』(原料を木灰液などで煮ること)
- 『扱』(異物や未蒸煮繊維を取り除くこと)
- 『截』(短く切断すること)
- 『舂』(切断された繊維を、臼などで搗くこと)
- 『成紙』(紙を漉き乾かすこと)。

このうち麻紙には『煮』の項目に仕事量の記載がなく、繊維を煮る工程がなかった。また、一日の仕事量では楮紙の約三倍の労力が掛かっている。これは苧麻が植物繊維中最も丈夫な為にかえって紙にし難かったとされ、そのため麻は平安時代には原料として使われなくなっている。

麻紙は大正時代に入って福井越前の紙漉き岩野平三郎と京都大学の内藤湖南らとの交流から復活する。岩野氏は『麻を金槌にてから碎き紙となるべき繊維を作り紙に漉きて送りぬ。(中略)、麻は煮て紙にするものにあらず。』と記しており、楮の製法と異なり、古代紙に近い製法を述べている。試作した麻紙を内藤湖南・牧野信之助・竹内栖鳳・横山大観といった学者や日本画家に送り、多くの日本画家と交流しながら、雲肌麻紙などの日本画用紙を開発した。そのため現在では麻紙に日本画を描くことが主流となっている。

岩野氏が用いた麻は大麻だが、古代紙には苧麻も用いられ、苧麻を用いた紙も日本画用紙として流通している。高知県の尾崎金俊製紙所が作っている高知麻紙である。雲肌麻紙以降に新たな日本画用紙として開発され、現在多くの日本画制作などに使用されている。

月山和紙

西川町の西山和紙は、紙漉きが減る中で飯野博雄氏が月山和紙と名称を変えて平成七年まで守っていた。名称は変わっても製法は変わっていない。西川町では平成元年に大井沢の「自然と匠の伝承館」に和紙工房を設置して月山和紙の普及を図ったものの、飯野氏が高齢のため辞退された。そこで、当時埼玉県小川町にいた三浦一之氏が招聘された。三浦一之氏は現在自分の工房を構えて和紙を漉いているが、地元楮も使い、月山和紙を引き継ぐとされている。地域でも技術継承の動きはみられ、岩根沢沼平の私塾で紙漉き復活に向けて取り組んだこともあったが、現在に続くまでは至らなかった。後継者問題は西川町の月山和紙(西山和紙)の抱える問題ともなっている。

月山和紙の特徴は原料が楮で、地元の楮を使って作る。月山判(縦二尺四寸五分×九寸五分、飯野博雄氏の紙から計測)と呼ばれる寸法に漉く。ネリには「ノリウツギ」という木の皮から出る粘液を使った。(トロアオイが全国的には有名)。出来上がった和紙は障子紙などに使ったという。当時の詳細な漉き方は分からないが、それぞれの漉き手により少しずつ違っていたとみられる。三浦氏の岩根沢の楮の刈り取り、楮蒸し、皮を剥ぎ、白皮とする作業は岩根沢や大井沢の方が手伝い行っている。

研究事業のなかでは青苧の紙を作る取り組みだけでなく、紙漉きの継承を図るため、平成二十五、二十六年には、三浦氏を講師として原料処理から抄紙までを二日間で学習する紙漉き講習会を実施した。楮の煮熱からチリ取り、紙漉きを行い乾燥するまでを学ぶ。参加者一人につき、小ささまざまな和紙を二〇〜三〇枚漉くことで、二日目にはそれなりに紙が漉けるようになる。三浦氏の地元楮の刈り入れ、楮蒸しにも紙漉き講習会と合わせて参加することで一連の作業を全て体験できる。三浦氏が地元楮を使い続けている事と、紙漉きの施設が整っていることから実施することができており、これまでの紙漉き継承の取り組みが生んだ成果ともなっている。

因みに、西川町の三浦一之氏は東北芸術工科大学日本画研究室との協力により、F五〇号という日本画専攻の課題に即したサイズの楮紙も制作している。

青苧紙

紙漉きの調査から大江町でも紙漉きが行われ、無関係ではなかったことが分かったものの、青苧の紙が作られていたわけではない。青苧紙は古いけれど新たな取り組みである。青苧紙は大江町の特産素材を知る糸口となつて欲しい。そのためには、出来上がった紙にも原料である青苧の素材感が活かされることを望ましい。

現在流通している日本画用麻紙は用途に合わせて改良され、麻の素材を前面に出しているわけではない。そのため、素材感を出すことで青苧紙を特徴づけることができると考えた。しかし、素材感は過剰な原料処理などにより損なわれやすい。そこで、古代麻紙の素材感を参考にするために、できる限り古代麻紙の製法に則つて取り組み始めることとした。

まずは、古代の製紙法に倣い、青苧の繊維を五〜一〇〇程度に切り、六時間木槌で叩いた。出来上がった原料は繊維が引つ掛かり、漉くことが非常に難しかったが、三浦一之氏の協力のもと、最初の青苧紙が出来上がった。柔らかな風合いと手触りに青苧の特徴が現れていたが、青苧が一〇〇割の紙は繊維が切られたため強度は弱かった。古代麻紙は漉いた後にも打紙などの表面加工をするなど、更に手間がかかっている。また、文献などから繊維を切る長さも長すぎたことが分かり、その後は三〜五割に繊維の裁断を調整し、改良を重ねている。

試作を重ねる中で、青苧紙は次第に安定した紙の形になっていったが、課題も生まれている。地域の特産としての青苧は繊維原料であり、どうやって紙の原料と繊維原料を確保して共存するかということである。

解決策としては和紙の工程と画仙紙という中国の紙を作る



青苧紙を使用した書



川合ひさ子氏の青苧織の着物(南陽市)



西川町大井沢自然と匠の伝承館での紙漉き講習会(平成25年)



青苧を水に浸す



青苧を刈り取る

工程を応用することとした。画仙紙には、原料を石灰（アルカリ）に浸けて繊維を発酵させる製錬方法がある。「レチング」と呼ばれるこの方法と「煮熟」を合わせ、「芋引き」をする前の表皮を灰汁で煮た後、容器に入れて保管する方法を考案した。この方法の利点は、芋引きをしないため、七月に採取される繊維でなく、多少の傷や細かな枝の出た九月十月に再び生えてくる二番芋を使うことができることで、糸と紙の原料を分けられることである。また、梅雨の時期に風雨により倒れた青芋も使えるため、糸にはできない原料も紙の原料にすることができるようになった。

紙の製法だけでなく、青芋紙を利用する方法にも素材を活かすことが重要である。地域に根差すことで、南陽市の川合ひさ子氏のように、製品として使用する道が取り組みを続ける原動力となるかもしれない。

これについても、現在流通する麻紙が日本画用紙として使われていることから、青芋紙に日本画を制作してみると、絵具の定着は思った以上によく、原料処理を丁寧に行うことで、日本画用紙としても魅力ある紙になる可能性があると考えている。一方で、西川町の三浦氏と大江町の青芋復活夢見隊の協力により、大江町の証書として使用する展開が進んでいる。

卒業証書作成

青芋紙が形になった翌年の平成二十四年度には青芋復活夢見隊と三浦一之氏の協力により、大江町の小学校の児童が自分たちで卒業証書を作成する紙漉き体験が行われ、平成二十五年度も継続した取り組みとなっている。大江町の小学校の卒業証書には青芋紙（青芋五〇・楮五〇）を用いることとなっている。使われる紙は青芋一〇〇割ではないものの、青芋の素材感の活きた紙となっている。青芋紙の制作では繊維の裁断を青芋復活夢見隊が行い、叩解以降を三浦一之氏が行うという分担が行われている。次年度以降は大江町が

主体となり継続する流れになっており、特産素材と伝統技術が繋がった取り組みとなっている。

青芋はがき作成ワークショップ

青芋紙には新たな紙を作るということに加えて、出来上がった紙を実際に使うことで、地元の人々に素材を通して地域の魅力を感じてもらおうという狙いを持っていた。しかし、青芋紙はもともと楮の三倍かかる労力の為、制作にはコストがかかり過ぎてしまった。そこで、実際に身近に使う機会も多いはがきサイズの紙漉きを通して、町民の方にも青芋紙を通して特産の素材に触れてもらうワークショップを開催した。紙漉きの全ての工程を大江町内で行えるわけではないが、平成二十五年、平成二十六年と実施し、平成二十六年には大江町文化祭に登場した人に参加してもらい好評を得た。「うちにも青芋が生えている」、「子供の頃に近所では紙を漉いていた」など、様々な感想が聞かれ、身近な素材を知る機会となり、実施した側でも、新たな地域の側面を知る機会となった。

おわりに

青芋紙の取り組みは、卒業証書や青芋はがき作成など少しずつ活用が進んでいる。その間、青芋や各地の和紙について調査を進め、地域間の共通点や各地の和紙と山形を見比べる機会を得た。

山形では大江町以前から南陽市の取り組みがあった。地域が異なると、それぞれの繋がりを認識することは少ないものの、青芋をみると最上川や街道、上杉家などの歴史を通じて、さらに多くの地域と繋がっていることが分かる。青芋についても調査研究をされてきた菊地和博氏は、これまでの取り組みを振り返って、「山形の農村部を支えた紅花に対して、山

間部の文化を支えたのは青芋だった。そういった地域に残っているものを今後どうつなげていくのが大事な課題だ」と言われ、地域間の連携が大切だと続けられていた。紙漉きの現場でも、後継者に継承できず失われる事例とともに、再興する事例もある。三浦一之氏が紙漉きを続けていることで月山和紙の継承となっていることは、西川町にとっても重要なだけでなく、その恩恵がなければ、青芋紙が形になることは不可能だった。青芋紙は大江町の青芋復活夢見隊との連携が取り組みの方向性となったことも確かだ、地域間の交流が更なる展開を生んでいる。

また、人の交流は思わぬ繋がりをみせる。初期の青芋紙は巡り巡って、大江町出身の吉村美栄子山形県知事のもとへ辿りつき、書が大江町に寄贈されることとなった。三浦氏一之氏の月山和紙や大江町の青芋の布などを使って額装された書は大江町の公民館などに置かれるということである。

地域には様々な素材があり、研究事業内ではそのごく一部について調査研究を行ったに過ぎず、足りない点や問題は山のように残っている。しかし、地域の特産など、素材という視点から他の地域との共通性を見出すことで、その素材に関わる文化遺産の再評価や、新たな活動の展開の糸口を見出すことができる。

今後は、「和紙と青芋」をキーワードにして、山形をはじめ、東北の和紙などを見て回りながら、地域の素材を見直す取り組みを少しずつ進めていければと考えている。



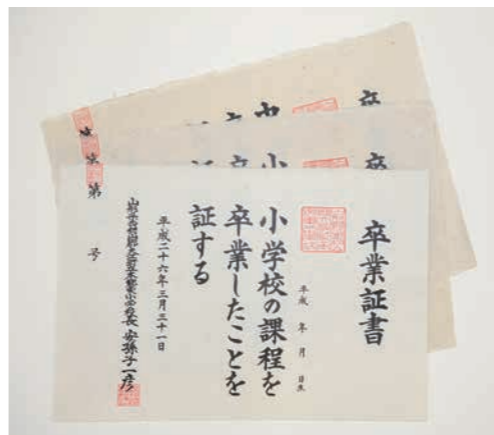
大江町指定文化財「御戸帳」明和7年 大江町



大江町指定文化財「御戸帳」文政年間（1818～1830）大江町



大江町指定文化財「御戸帳」江戸末期 大江町



青芋紙を使った卒業証書



大江町での青芋はがき作成ワークショップ（平成25年）